

2016 年度 1 学期 学部「現代哲学講義」大学院「認識論講義」

講義題目：あなたは相対主義者ですか

入江幸男

第 2 回講義 (20160415)

§ 1 導入：「あなたは相対主義者ですか」と問う理由：

補足：一学期は、理論哲学での相対主義を検討するので、できるかぎり相対主義を批判する方向でアプローチし、そこに登場する問題を考えたい。二学期は、文化相対主義を扱うので、できるかぎり相対主義を擁護する方向でアプローチし、そこに登場する問題を考えたい。この二つのアプローチの関係については、2 学期に考えたい。

§ 2 相対主義とは何か？

(1) プロタゴラスの相対主義「人間は万物の尺度である」(先週の続き)

先週の続き：入不二は、次は矛盾しないと考える。つまり、ソクラテスによるプロタゴラス批判は成功していないと考える。

「P にとって『P にとって、人間尺度論は真である』と、
『O にとって、人間尺度論は偽である』は、真である」

ここでは、P の人間尺度論の理解と、O の人間尺度論の理解が異なると思われるので、次のように言い換えられる。

「P にとって『P が理解する人間尺度論は、真である』と、
『O が理解する人間尺度論は、偽である』は、真である」

もしこの書き換えができるならば、「P が理解する人間尺度論は、真である」と「O が理解する人間尺度論は、偽である」の主語は異なる対象であるので、二つは矛盾しない。したがって、入不二、Vlastos、Burnyeat などの結論と同じく、これは矛盾しない。しかし、これは、主語が異なるのだから、人間尺度論を人間尺度論をめぐる対立に適用した整合的な事例になっているとは言えない。

{後日の注：入不二、Vlastos、Burnyeat は、プラトンのプロタゴラス批判は失敗していると考え。プロタゴラスは、まだ生きている。}

(2) 入不二基義の定義

入不二基義によれば、相対主義とは

「真偽や善悪などは、それをとらえる『枠組み』や『観点』に応じて変わる相対的なものであり、唯一絶対の真理や正しさなどはない」(『相対主義の極北』2001、vii)

という立場である。この定義を次のように言い換えることができる。

相対主義とは、「『枠組み』や『観点』から独立した、唯一絶対の真理や正しさはない」という立

場である。

この定義には、次の二つの要素が含まれている。

①「枠組み」や「観点」から独立した真理や正しさはない。

②唯一絶対の真理や正しさはない。

おそらく、①から②が帰結する。もし次の③

③「枠組み」や「観点」は複数ある。

を認めれば、①と③から、②がほぼ帰結するからである。

{後日の注：「概念枠相対主義」は「概念枠」を指示できなければならないだろう。もし概念枠1を指示できるとすると、それを他の概念枠2と比較できるだろう。つまり、概念枠1と2を比較するときの概念枠は、第3の概念枠だろうか、それとも概念枠1だろうか。

一方で、第3の概念枠において比較できるのなら、そのとき人は、概念枠3を最終的な唯一の概念枠とみなしていることになり、概念枠相対主義ではないのではないか？

他方で、概念枠1において、概念枠1と2を比較するのだとするということは、可能だろうか。

私は、私と他者を比較することができ、大阪大学は、大阪大学と名古屋大学を比較することができるのではないか？ しかし概念枠2においても、概念枠1と2を比較できるだろう。ここに概念枠相対主義の余地がある。 }

概念枠相対主義にせよ、人間相対主義（人間尺度論）にせよ。あるいは他の「あるXにとって」にせよ、それは次のグローバル相対主義としては成立しない。

(3) グローバル相対主義「すべての真理はただ相対的に真であるにすぎない」あるいは
「なにものも、絶対的に真ではない」

(John MacFarlane, Assessment Sensitivity, 2014)

批判：もしグローバル相対主義が「相対主義は誰にとっても（あるいはどの概念枠にとっても）真である」というならば、それは少なくとも一つは、相対的でない真理があることを認めることになる。これはグローバル相対主義に矛盾する。

もしグローバル相対主義が、「相対主義はすべての人にとって（あるいはすべての概念枠にとって）真なのではない」というならば、その時にもグローバル相対主義に矛盾する。

ゆえに、いずれにしても、グローバル相対主義は自己矛盾する。

グローバル相対主義からの反論：第二の角「相対主義はすべての人にとって（あるいはすべての概念枠にとって）真なのではない」と主張することは、相対主義者にとって、矛盾ではない。

反論への批判：同値図式「命題pは真である iff p」を認めるとすると、これを適用して、「相対主義はすべての人にとって真なのではない」から『相対主義はすべての人にとって（あるいはすべての概念枠にとって）真なのではない』は真である』を導出できる。ところで、『相対主義はすべての人にとって（あるいはすべての概念枠にとって）真なのではない』は真である』は、次のいずれかであ

る。

(以下の表現では、「(あるいはすべての概念枠にとって)」を省略した。)

『相対主義はすべての人にとって真なのではない』は絶対的に真である」

『相対主義はすべての人にとって真なのではない』は相対的に真である」

前者を認めると、グローバル相対主義に反する。ゆえに、後者を認めなければならない。後者を認めるとき、これからさらに次のいずれかが帰結する。

「『相対主義はすべての人にとって真なのではない』は相対的に真である」は絶対的に真である」

「『相対主義はすべての人にとって真なのではない』は相対的に真である」は相対的に真である」

前者を認めると、グローバル相対主義に反する。ゆえに、後者を認めなければならない。後者を認めるとき、これから同様の反復が生じ、次のようになるだろう。

「…『相対主義はすべての人にとって真なのではない』は相対的に真である」は相対的に真である」は相対的に真である」……」

以下同様に無限に反復することになるだろう。このように無限に続けなければならないとしたら、それは主張として成立しないということになるだろう。したがって、グローバル相対主義は、主張として成立しない。

<予想される疑問点>

「…は相対的に真である」の場合にだけ、それを無限に反復する必要があるのだろうか。「…は絶対的に真である」の場合にも、それを無限に反復する必要があるのだろうか。もしそうだとすると、(次のローカルな相対主義の主張も含めて) およそいかなる主張も成立しなくなる。

この疑問を避けようとする、私たちは、「…は真である」と「…絶対的に真である」を同義だとしなければならないのではないだろう。つまり、「pは真である」からは、『pは真である』は真である」が帰結する、逆も成り立つ。同値図式「命題pが真である iff p」が成り立つように、「命題pが絶対的に真である iff p」が成り立つ。

(4) ローカル相対主義「相対主義の主張自体は、絶対的に真である」

(MacFalane, *Assesment Sensitivity*, 2014) これは自己矛盾しないかもしれない。相対主義が可能であるとすれば、ローカル相対主義として可能であろう。そして、これが可能であるかどうかを確認するためには、「相対的に真」「ある人 X にとって真」「ある概念枠にとって真」などが何を意味するのかを、明確にする必要がある。

そこで、20世紀において最も影響力の大きい相対主義的な主張であるトーマス・クーンのパラダイム論を検討したい。

{後日の注：ローカル相対主義は、究極的に根拠づけられた知（絶対的な知）が存在しない、という主張と矛盾するのではないか？}

§ 3 クーンのパラダイム論あるいは概念枠相対主義

(「パラダイム論による科学観の革命」(『現代思想のトポロジー』里見軍之編、法律文化社刊、1991) より引用)

以下

西洋文明の特異性は、逆説的なことにその文明の普遍性にある。「いったい、どのような諸事情の連鎖が存在したために、他ならぬ西洋という地盤に於いて、またそこにおいてのみ、普遍的な意義と妥当性を持つような発展傾向を取る文化的諸現象が姿を現すことになったのか。」(『宗教社会学論集』序言) かつてマックス・ウェーバー(1864-1920)は、この問いに取り組んだ。この問いは、西洋以外の地域で近代化を目指す人々にとっても社会的に緊急の問題であった。そして、西洋文明の中でも普遍性において特に際だっているのは、近代自然科学である。従って、近代自然科学は「どのような諸事情の連鎖が存在したために」生まれたのだろうか、という問題は、科学史にとどまらず人類史全体にとっても重要な問題である(参照、バターフィールド『近代科学の誕生』)。

しかし現在では、西洋文明がはたして本当に普遍性を持っているのかどうか、が疑われており、理論的および実践的な関心の中心は、この問題に移動しているように思われる。すでに、人類学では文化相対主義が主流になっており、歴史学でも西洋中心の歴史観が批判されている。ただし、このような流れの中で、近代自然科学だけは最後まで(あるいは今もまだ)その普遍性が疑われていなかった。しかしそのような状況は、一九六〇年前後に相次いで現れたトーマス・クーン、N・R・ハンソン、S・トゥールミン、P・ファイヤーアーベントらの仕事、いわゆる新科学哲学の登場によってまさに革命的に変化することになった。今から、この革命をのぞいてみよう。

.....

<パラダイムとは何か> クーンが最初に「パラダイム(paradigm)」という用語を導入したのは、1959年6月に開催された会議のために準備し、その会議の議事録として初めて刊行された「本質的緊張」という題名の論文においてである。そのころ彼は、通常科学を科学者集団の成員同士の合意の結果と考えていたが、彼らの研究方法を説明したり、とりわけ他の研究者の研究を評価する際に通常見られる全員一致を説明したりするためには、彼らの間で、「力」と「質量」、「混合物」と「化合物」といった準理論的用語を定義する特質に関して一致があると仮定せねばならなかった。しかし、このような定義が教えられることはまずなかったし、ときに行われた定義をする試みは往々にして断固たる反論に見舞われていた。彼が捜していたような合意は存在してはいなかったのである。しかし、彼は1959年の始めに、実際には、このような合意は全く必要がないということに気づいた。たとえ定義を教えられてはいないとしても、科学者は精選された問題の標準的な解き方は教えられているのであって、それらの問題中には「力」とか「化合物」とかの用語が登場するのである。もし彼らが充分な一連の標準例を受容するならば、彼らはその後の自分の研究をそれらを手本にして行うことができるのである。この手続きは、語学を学ぶ学生達が動詞の活用や名詞・形容詞の格変化を学ぶ際の手続きに非常に近いように思われた。彼らは、たとえば *amo, amas, amat, amamus, amatis, amant* と暗唱し、次にこれを標準形として用いて他の第一種活用ラテン語動詞の能動態現在を作り出すのである。そこで、クーンは、語学教育に於てこのような標準例を表すのに普通用いられる用語「パラダイム」paradigmを、斜面とか円錐振子というような、科学の標準的な例題に拡張して適用したのである。(参照、『本質的緊張』の序文)

従って、「パラダイム」の最初の意味は、このような範例的な問題解決 *exemplar problem solutions* であったのだが、その意味は次第に拡張され、まず、このような受容された諸例題が最初に現れる古典的な書物、例えばアリストテレスの『自然学』、プトレマイオスの『アマルゲスト』、ニュートンの

『プリンキピア』と『光学』、フランクリンの『電気学』、ラヴォアジエの『化学』、ライエルの『地質学』などを指すようになり、ついには、特定の科学者集団の成員が共有する完全で包括的な一連の立場を指すようにまでなったのである。

<パラダイムの定義>

クーンは、『科学革命の構造』では、パラダイムを次のように定義している。パラダイムとは、次の二つの性格を持つ業績である（参照、十二頁）。

1、他の対立する科学研究活動を捨てて、それを支持しようとする特に熱心なグループを集めるほど、前例のないユニークさを持っていること、

2、その業績を中心として再構成された研究グループに解決すべきあらゆる種類の問題を提示すること。したがって、パラダイムとは、実際の科学の仕事の模範となっている例—法則、理論、応用、装置を含めた—があつて、それが一連の科学研究の伝統を作るモデルとなるようなものである。例えば、プトレマイオス天文学、コペルニクス天文学、アリストテレス力学、ニュートン力学、粒子光学、波動光学、などがその例である（参照、十三頁）。

<パラダイム以前> このようなパラダイムが出来上がり、それに基づいて研究が行われるということが、その科学の成熟した証しである。(p14)このようなパラダイムが出来る前には、その研究分野は、本質的に見解を異にする様々の学派の対立となる。例えば、古代から一七世紀の末までは、光の本性について一般に受け入れられた唯一の見解というものは存在しなかった。そのかわり、エピキュロス派、アリストテレス派、プラトン派の理論などのいろいろな変形が多数あつて、相対立していた。ニュートンが、初めて、物理光学においてほぼ完全に受け入れられるパラダイムを引き出したのである。

クーンによれば、社会科学の分野ではパラダイムはたして出来ているのかどうかさえまだ問題である。

<通常科学研究> このようなパラダイムを基礎として行われる科学研究を、クーンは通常科学（normal science、規範科学と訳されることもあり、そういう側面があることも事実である）と呼ぶ。通常科学とは「特定の科学者集団が一定期間、一定の過去の科学的業績（パラダイム）を受け入れ、それを基礎として進行させる研究」（十二頁）である。

通常科学とは、パラダイムによって特に明らかにされる事実、知識の拡張や、それらの事実とパラダイムによる予測との間の一致の度合の増大、そして更に、パラダイム自体の整備の過程である（二十七頁）。

<パラダイム変革としての科学革命> このパラダイム変革はどのような理由で起こるのだろうか。クーンが上げている理由は次のようなものである。

- 1、新しいパラダイムで、古いパラダイムを危機に導いた問題を解くことが出来るということ。
- 2、古いパラダイムでは思いもよらなかった現象の予測が、新しいパラダイムのもとで出来るということ。
- 3、新しいパラダイムが、古いものよりも「きれいで」「要領よく」「簡潔」であること。ただし、おそらくこの様な議論は、科学においては数学に於けるほど効果をもたない。

- 4、どのパラダイムが、今まで完全には解けなかった問題に将来解こうという研究方向を与えるか、である。なぜなら、科学を進めるいろんな道のうちのどれを採るかの決定が要請されるとき、その決定は過去の栄光よりも将来の約束によらねばならないからである。

しかし、これらの理由はどれも、新しいパラダイムの方が理論的により真理に近いことを証明するものではない。

<パラダイムの共約不可能性(incommensurability)> パラダイムは、通常科学研究において、解くべき問題とその解答と解答の正当性を決める規準を与えている。したがって、**パラダイムが変化すると、解くべき問題とその解答と解答の正当性を決める規準もまた変化することになる**。全ての問題を解いてしまったパラダイムは存在しないし、また二つのパラダイムの解けない問題が全く同じになることもないので、どちらのパラダイムを選択するかという問題には、**どの問題を解くのがより有意義かという問題が含まれている**。この価値判断を含む問題と、**解答の正当性を決める規準の選択の問題は、全く通常科学の外側にある規準によってのみ答えられる問題である**。なぜなら、特定のパラダイムによってこの問題に答えて、そのパラダイムを選択することは、循環論証になるからである。

これ以上に重要なことは、パラダイム変革が起こるときは、世界自体もそれと共に変革を受けるということである。ゲシュタルト心理学の反転図形のように、「革命前に科学者の世界で鴨であったものが、後には兎となる。はじめ箱の外側を上から見た人が、後にはその内側を下から見るのである。」(一二五頁) これは、N・R・ハンソンの用語を用いれば、「**知覚の理論負荷性(theory-ladenness)**」ということであり、我々は「ものを見ている」のではなく「**ことを見ている**」ということである。カルナップの検証理論もポパーの反証理論も、**理論に対して中立的な観察言語に頼っているが、そのような中立的観察言語を見いだすことは不可能なのである**。したがって、**一定のパラダイムに拘束された観察言語を、パラダイムの選択規準にすることは出来ない**。「対立するパラダイム間の移行は、同一の規準で測り得ないもの間の移行であるが故に、**論理や中立的経験に迫られて一步を踏み出すというようなことは有り得ない**。ゲシュタルトの切り替えのように、それはすべては、一度に(一瞬にして起こる必要は必ずしもないが)起こるか、全然起こらないかのどちらかである。」(一七〇頁) 新科学哲学のキャッチフレーズをもう一度繰り返そう。**理論を反駁するのは、事実ではなくて他の理論なのである**。

<科学革命を通しての進歩?> 問題は、科学革命を通しての進歩を認めうるかどうかである。「少なくとも勝った方にとっては、革命の成果は進歩でなければならず、後に続く後輩達も、歴史として同じ様な評価を下すであろうと確信している。」(一八八頁) そして、その確信に基づいて教科書が書き換えられるので、「**成熟した科学者集団のメンバーは、オーウェルの『1984年』の典型的な登場人物のように、権力に依って書き換えられた歴史の犠牲者のようになる**。」(一八八頁)

クーン『科学革命の構造』中山茂訳、みすず書房

『本質的緊張』我孫子誠也、佐野正博、訳、みすず書房

『コペルニクス革命』常石敬一訳、講談社学術文庫

クワイン『言葉と対象』勁草書房

ハンソン『知覚と発見』紀ノ国屋書店

『科学理論はいかにして生まれるか』講談社学術文庫

L・ローダン『科学は合理的に進歩する』村上陽一郎、井山弘幸、訳、サイエンス社

H・I・ブラウン『科学論序説』野家啓一、伊藤春樹、訳、培風館

D・ブルア『数学の社会学』佐々木力、古川安、訳、培風館

中山茂編著『パラダイム再考』ミネルヴァ書房

ここまで

■パラダイムの共約不可能性の理由

対抗関係にあるパラダイムが、共約不可能なのは次のような理由をドッペルトはつぎのようにまとめている。

- (1) 同じ科学言語で語られていないこと、
- (2) 同じ観察データが提出されたり、承認されたりあるいは知覚されたりしないこと、
- (3) 同じ問いに答えたり、同じ問題を解いたりすることに関心がないこと、
- (4) 十全な説明あるいは正当な説明とさえみなされるものが同じ仕方で解釈されないこと

(ジェラルド・ドッペルト「クーンの認識論的相対主義 解釈と擁護」、J. W. メイランド、M. クラウス編 『相対主義の可能性』産業図書、213)